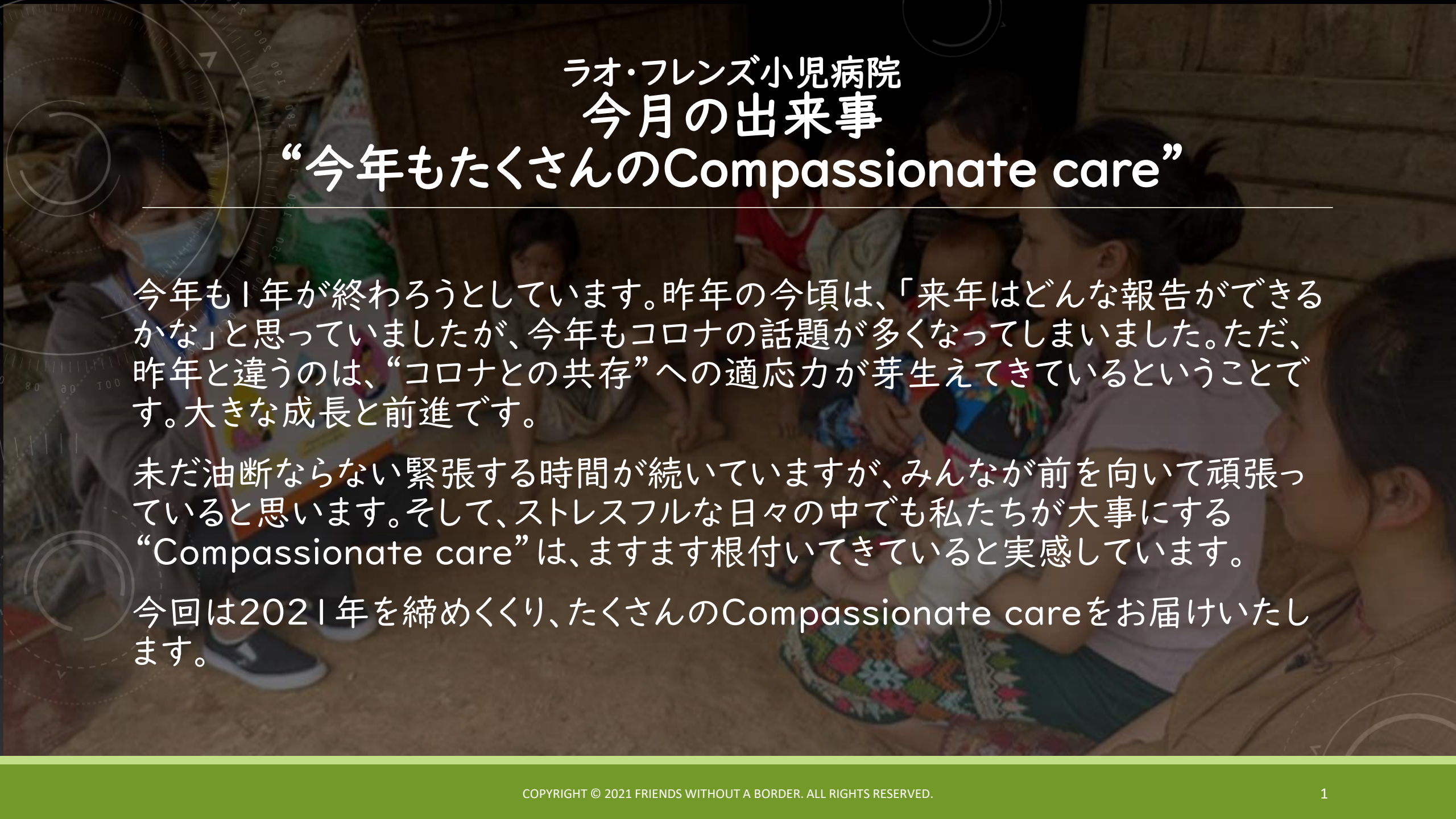




ラオ・フレンズ小児病院 今月の出来事 “今年もたくさんのCompassionate care”

今年も1年が終わろうとしています。昨年の今頃は、「来年はどんな報告ができるかな」と思っていたのですが、今年もコロナの話題が多くなってしまいました。ただ、昨年と違うのは、“コロナとの共存”への適応力が芽生えてきているということです。大きな成長と前進です。

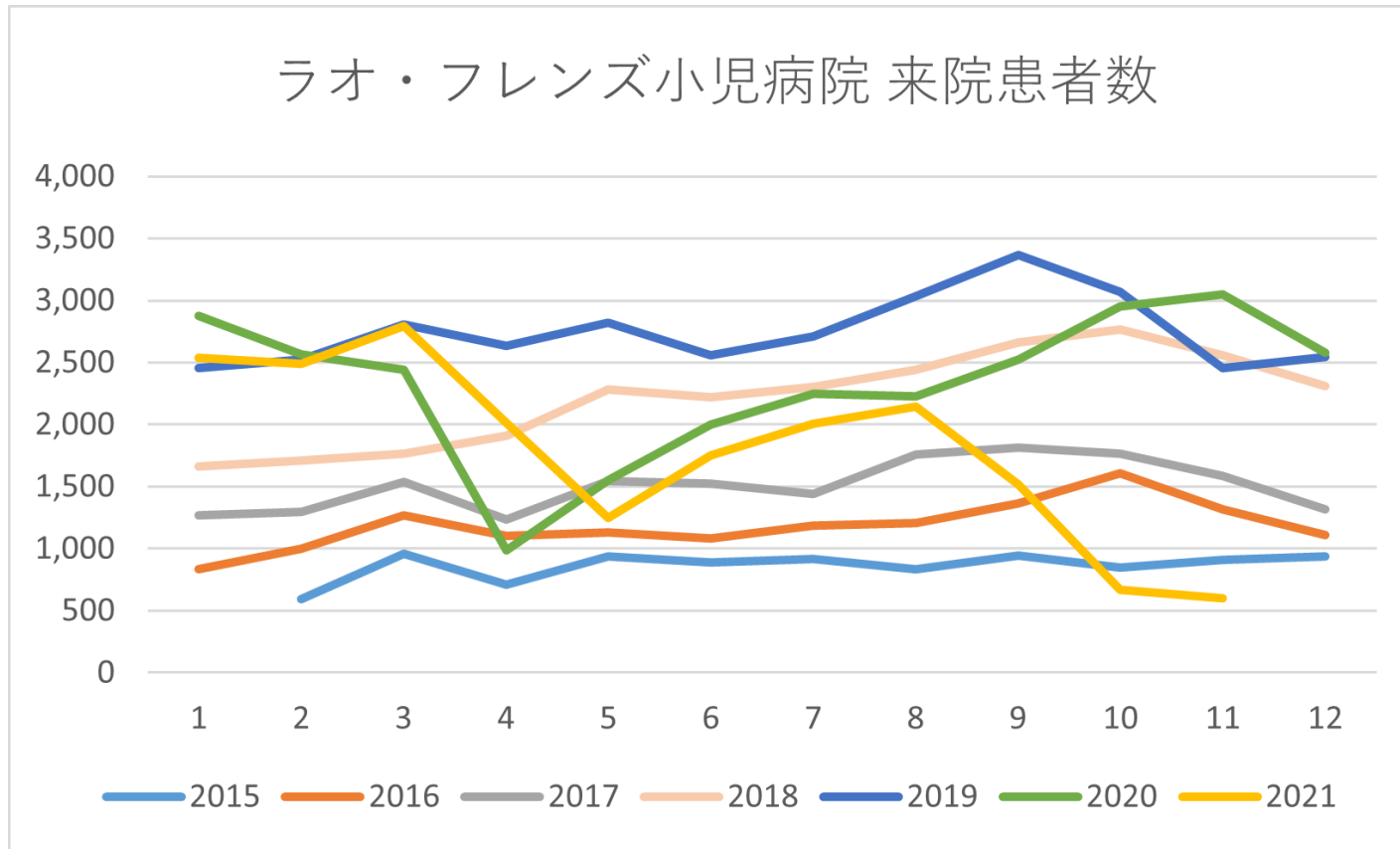
未だ油断ならない緊張する時間が続いていますが、みんなが前を向いて頑張っていると思います。そして、ストレスフルな日々の中でも私たちが大事にする“Compassionate care”は、ますます根付いてきていると実感しています。

今回は2021年を締めくくり、たくさんのCompassionate careをお届けいたします。



患者数推移

ラオ・フレンズ小児病院 来院患者数



本題に入る前に、ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）の概況をお伝えいたします。前回コロナ感染拡大の状況の特集してお知らせいたしましたが、引き続き感染者数は高止まりとなっています。LFHC院内でも感染が発生し、緊張が走りました。感染者は隣接する県立病院のコロナ病棟へ転送しますが、小児の感染症例が増えたため、当院からスタッフを派遣し対応をしています。

こうしたコロナ感染の状況があるために、人々は来院を控えているようで、来院患者数は引き続き減少傾向にあります。入院患者さんは通常の半分から3分の2前後で推移しています。コロナ感染を恐れ来院を控えているうちに、それ以外の病気が悪化してしまうということがないかと、とても気がかりです。

コロナ禍でも物語はいっぱい

ラオスのコロナ禍が長引いていますが、そんな中でも、たくさんの物語がありました。

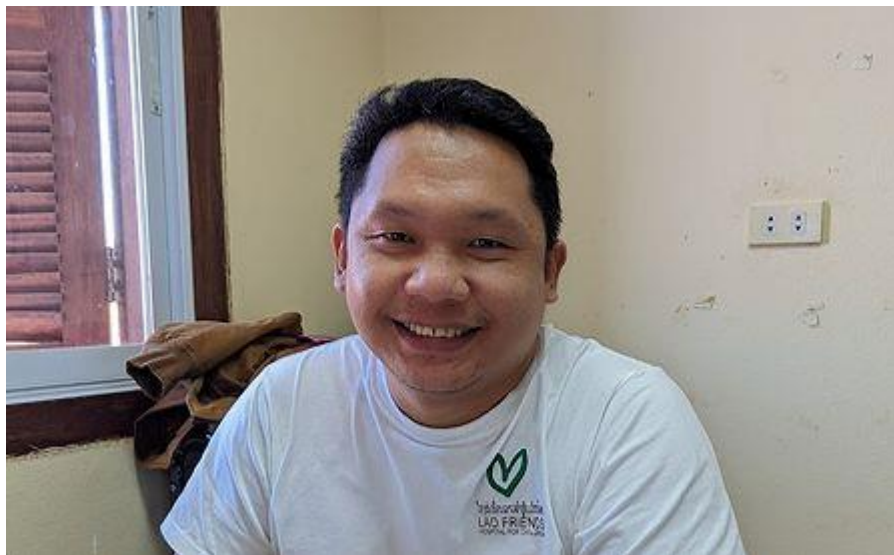
左上の写真は、コロナ病棟に入院中の妊婦さんから赤ちゃんを取り上げたところ。右上の写真も同様で、これが4人目！マスクと防護服で見えないですが、みんないい笑顔をしています(きっと!) 赤ちゃんを取り上げることで知り合うことになった妊婦さんご家族との出会いは運命ですよね。

ロックダウンにより思うように訪問看護に出かけることができません。しかしどうしても気になる患者さんはいますし、電話も通じにくい村だとなおさらです。強い規制の中、何とか向かうことができたのが下の写真です。優先順位をつけて保健局と郡から許可をもらい、早朝から夜遅くまで一気に回った訪問看護。行ってよかったとつくづく実感できました。





Dr. Thomas Brune 院長



Roderic Labicane (Dickya) 看護エデュケーター

新しい専門家がやってきた！

コロナ感染拡大の影響で、昨年3月に海外からの専門家がみんな帰国してしまいました。それが結果的にラオス人スタッフの自立を後押しする形にもなったので、コロナのポジティブな影響だったと思っています。それから1年半以上の月日が過ぎ、そろそろ知識とスキルを新たな教育によってステップアップしていく時期になりました。10月から3名の新しい専門家が着任し、ラオス人スタッフへの指導をスタートしてくれています。



Giselle Morean 新生児看護スペシャリスト

院長はドイツ、看護エデュケーターはフィリピン、新生児看護スペシャリストはカナダからという多国籍チームです。既に駐在していた他の専門家の出身国はフランス、イギリス、オーストラリア、日本ですので、“Friends Without A Border”そのままです。多国籍チームでLFHCをラオスで一番の病院に作り上げます！



患者さんの家族へ寄り添う

LFHCは小児病院です。ほとんどの患者さんは家族と一緒に入院生活を送ります。家族へのケアは、患者さんと同様とても重要です。写真左はカウンセラーがお母さんとお話しをしているところです。新規入院した家族からは疾患の理解や、入院に際して困っていることなどを聞きながら良い関係づくりのための時間を作っています。右の写真は、訪問看護で長く関わっている患者さん家族ですが、家族の写真が欲しいというお母さんのために、パチリ。プリントアウトしてラミネートで保護し、持って行きました。とても喜んでくれたことに、スタッフも喜ぶ。これが重要です！やってあげたんだという目線ではなく、家族を喜ばせたいと思うような感覚ですよ。ね。(結構上手に写真が撮れて私も満足。笑)



パパになったスタッフ

LFHCのナースに赤ちゃんが産まれて、パパになりました。当院の新生児室に入院し、プライベートの時間ですが、もちろん勝手知ったる新生児室ですから、自分でカルテに記録までしてくれています。笑
お父さんなので、もちろん愛情たっぷりなのは当然なのですが、あまりにも微笑ましい光景だったので、パチリ。もともと心優しいスタッフですが、さらに優しくなりそうですね。





分包作成中！

タイトルの通り、写真のスタッフはお薬の1回分ずつの分包を作っています。お薬を長期に渡り服用しなければならない患者さんがいますが、どうしても服用方法を覚えられなかったり、飲み忘れがあったり。そんな患者さん家族のためにどうすればいいかを話し合い、分包を作ることになりました。1回分ずつ朝用、夜用と分けて3か月分を分包しています。それを1週間ごとにまとめ、日付を付けてわかりやすく箱に詰めて……と、結構な手間がかかりますが、お薬の服用状況をチェックした時に、「またちゃんと飲めていなかった」という家族のがっかりがなくなるように、せっせと作ります。どうすれば問題が解決するかなと諦めずに考えることが、プロとしてのお仕事ですよ。

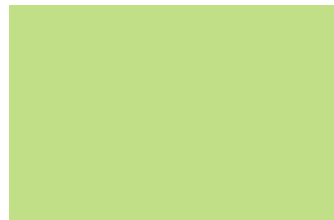
看取りケア

どんなに手を尽くしても、残念ながら亡くなってしまう患者さんがいます。その場合、民族のしきたりによって遺体を連れて帰れず、病院近くで埋葬してから帰宅します。また時には埋葬自体にも付き添えず、隣接する県立病院の埋葬担当スタッフへ遺体を引き渡さなければならないこともあります。その際、埋葬場所まで搬送するのに使用していたのが、段ボール箱でした。それを目にするたびに心がきゅっとさせられ、スタッフに相談しました。そして、ラオスのしきたりに沿ったお棺を作ることを思いつきました。こうした文化的な影響が大きい事柄には、私たち外国人の方法をそのまま押し付けないようとても注意しますが、これはいいアイデア!ということで、みんながきれいに仕上げてくれました。右の写真は、その制作風景です。できれば使わずにいられたらよいけれど、使う時にはせめて、家族の心痛を少しでも和らげることにつながればいいなと思います。看取りという言葉は日本独特の言葉ですが、ラオスの文化にあった看取りケアを考えていきたいです。



ご遺体をダンボールに入れるの?!と思われるかもしれませんが、ここではそれでよいのだそうです。ラオスでは金銀を含む光った色がお葬式にふさわしい色だそうで、それらの色をベースに、寂しくないようにとお花やハートの切り抜きを貼っていました。全てラオス人スタッフが考えたデザインです。私たち外国人は、こうした文化をラオス人から謙虚に習う姿勢が大事だと実感しています。





これぞ、全人的アプローチ!

身体に障がいがあり嚥下することが困難な患者さんがいます。退院後の家庭では、栄養補給は鼻から管を通して流動食を注入しなければなりません。

Aちゃんもその一人で、訪問看護で定期的にフォローアップしています。体重の増加で栄養補給がうまくいっているかどうかをチェックしますが、Aちゃんの体重が減っていました。そして、鼻からの管もない。うーん、どうして?ってことになりますね。最初はAちゃんが管を嫌がるから抜いてしまったと言っていたが、さらに話を聞くと、流動食を作るためのミキサーが壊れているということです。ミキサーがなくては流動食を作るのは大変だと見てみると、ミキサーではなく、ヒューズだと判明。早速ヒューズを買いに行って、修理完了。訪問看護ナースのスキルは医療+家電修理+心が必要です!

これこそがCompassionate careであり、全人的アプローチです。スタッフの成長にまたうれし涙と1人乾杯です。🍷🍷



子供の笑顔のために

コロナ感染の拡大により、院内では感染対策の予防着で業務にあたりますが、表情も分からず、誰なのかもすぐに見分けがつかない時が多々あります。子供たちからするととても怖いだろうと思うのですが、その恐怖を少しでも和らげようと、スタッフたちも改めてCompassionate careの精神を発揮してくれています。忙しくても予防着がしんどくても、そこに子供たちがいる限り、子供たちの笑顔が一つでも増えるように“スー！スー！”（ラオス語で頑張れー）です。真ん中の写真、わかりにくいのですが、泣き叫ぶ子にシャボン玉を作ってあげているんです。右は点滴を入れる時に注意をそらすためにスマホで動画を見せています。





二足の草鞋で

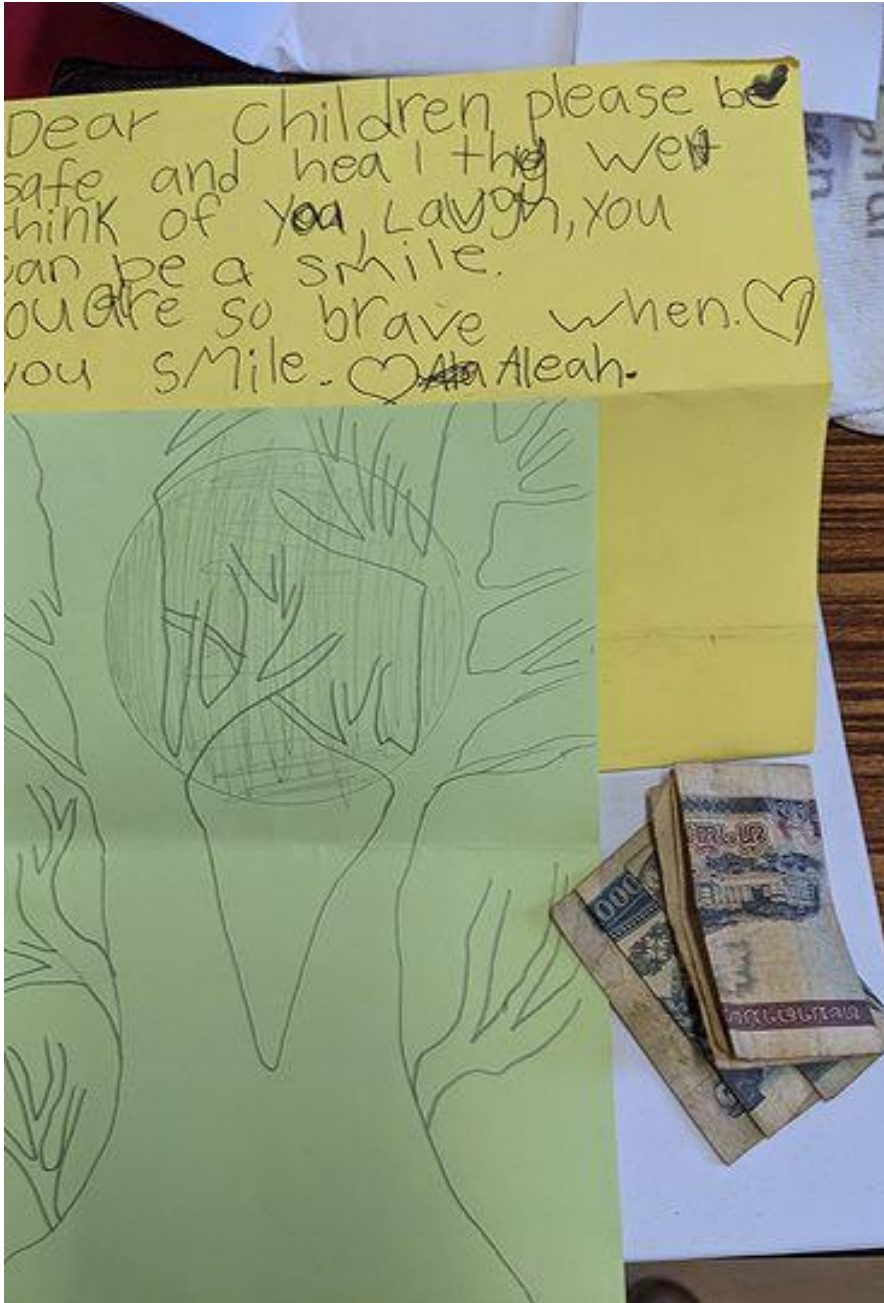
ダリー看護師は、開院当初からのスタッフの一人です。新人さんだった頃から大成して、今はリーダーとして業務がスムーズに遂行されるよう同じシフトで働くスタッフをまとめてくれています。

そのダリーが病院の近くに小さなレストランをオープンしました。レストランの名前は“Unity レストラン”。Unityは団結、まとまる、統一するという意味がありますが、その名の通りのレストランでした。

ある時、ダリーの友人が病気になり失業をしてしまいます。ダリーは以前から色々な新しい経験をしたいと思っており、料理やレストランについて詳しい友人を助けたいとの思いもあって、レストランのアイデアを出しました。ダリーは料理はできないので、その部分は友人が調理とレストランの運営を担当し、お互いにサポートし合ってレストランが成り立っています。

そして、また別の方が、お店のサポートと病院の子供たちへのサポートを実現するために、Unityレストランへ50食の食事をオーダーし、病院の子供たちに提供してくれました。この時ダリーは価格をディスカウントし、できるだけたくさんの食事が提供できるようにしました。

私も早速Unityの仲間に入れてもらおうと、明日のランチをオーダーしました!みんな誰かに支えられて生きているのですよね。忘れてはいけないと思いい出させてもらいました。院内では看護師として、院外ではレストランのオーナーとして二足の草鞋でCompassionate careを実践。素敵に成長しているスタッフに心が躍りました。ありがとう!



嬉しいメッセージ

ルアンパバーン市内で、病院の子供たちへ衣類の寄付を集める企画がありました。とてもたくさんの衣類とおもちゃが集まり、院内の子供たちやご家族へ配布をしています。熱帯モンスーン気候のラオスでも、11月から2月くらいまでは、朝晩の気温が10℃を下回ることがあります。山沿いではさらに低くなるので、防寒の意味でもお洋服が必要な季節にとっても良いタイミングの企画でした。

そして、その中にこんなかわいい心温まるカードもありました! チルドレンの皆さんへという始まりで、安全に健康でありますように。あなたのことを考えています。笑顔を大切にね。という内容のメッセージと大木の絵、そして15,000キップの寄付まで入っていました!

うわ〜、なんかいっぱい優しさが伝わってきました。ホッとしました。思いやるという気持ち、嫌な思いをさせないようにと思う気持ち、そういった小さなことの積み重ねがCompassionate careだと思います。大人になると、知らない間に純粋な心がなくなって大事なことを見逃してしまいます。ピュアな心を持つ小さなドナーさんに学びました。感謝です。



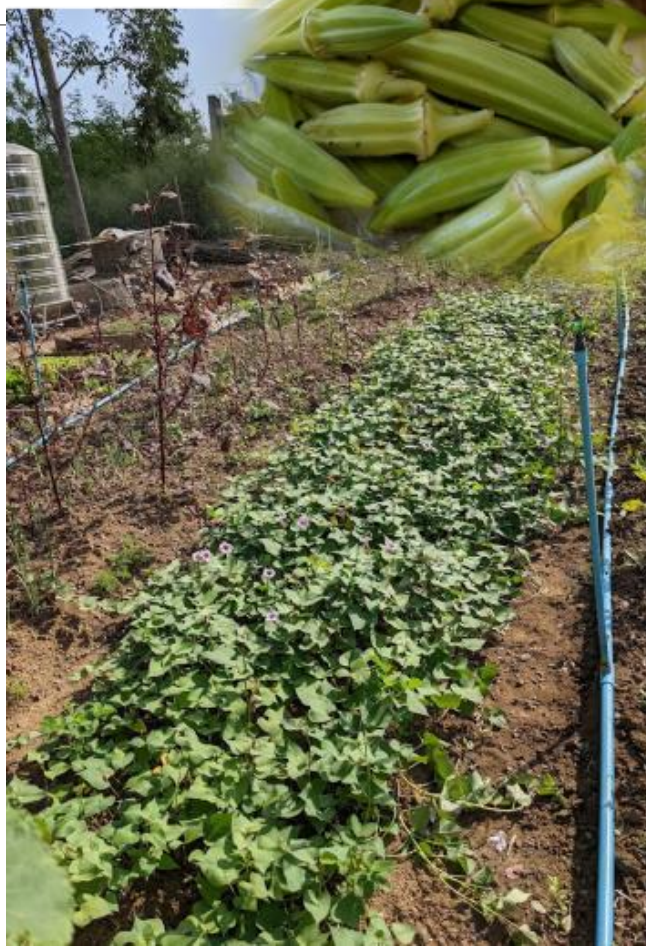
“おんぶ”から感じたもの

小さなドナーさんからのメッセージ同様、この姉妹からも学びました。おんぶしてもらっているのがダオちゃんという患者さんで、おんぶをしているのがお姉ちゃん。ダオちゃんは手術待ちのために3か月も入院していました。足の骨が弱っているために自分で歩くことができません。そのダオちゃんを、いつもこうしておんぶして移動のお助けをしていたのがお姉ちゃんです。

毎日見かけたこの“おんぶ”。見るたびに「寄り添うってこういうことだよなあ」としみじみと眺めていました。もちろん車椅子もあるけれど、お姉ちゃんはおんぶを選んで寄り添ってた。おんぶって身を任せるってことですものね。単に移動手段というよりは、信頼、愛情、安心、心丈夫、温かみ、慈しみなどなど、たくさんの感情が混ざったものがこの“おんぶ”から感じられました。

私たちが目指すCompassionate careのお手本にしたいなと思いました。

手作り野菜畑



院内では、食材を調達できない患者さん家族へは食材を配給しています。特にコロナ感染拡大によるロックダウン規制の発出中は、人の移動が制限され、家族が買い物へ行くこともできませんでしたので、ほとんどすべての家族がこの配給を受けていました。

LFHCでは食育の一つとして、数年前から敷地内でオーガニック野菜を作っています。その野菜を配給に使い、コスト削減で健康にもよいという一石二鳥を実現。院内に一人いるガーデナーさんが、患者さんが喜びそうな菜っ葉、お芋、レタス、インゲン、カボチャなど種類も豊富に作っています。時には小さな失敗もあり、先日は、せっかく育てたオクラが患者さんたちに不人気だったということがありました。収穫した美味しいオクラは私が買い取らせていただきました！

土を耕すところから始まった野菜には、栄養にプラスしてスタッフの繊細な愛情もたっぷり詰まっています。



お年寄りにも優しい

小児病院なので子供との話題が多くなりますが、お年寄りにも優しいというお話です。写真のお婆ちゃんバイクは私(お婆ちゃん)のバイクです。バイクで通勤しているのですが、いつも写真の一番奥の方に駐車しています。でも、私が帰る頃になると、セキュリティさんがこうして手前の方へ移動して、出やすいように向きを変えておいてくれるのです。そして、私がモソモソとパーキングに向かっている姿を見つけると、そのまま乗車して出られるように移動してくれるんです。地面が砂利なのでとても動かしにくいということをちゃんと考慮してくれているのですね。最近、私の白髪が増えて来てからは、なおさら優しくなった気がする。時々、そんなにヨボヨボかなと思ったりもしますが、いよいよお婆ちゃん突入かしら? 赤ちゃんにもお年寄りにも優しくできるスタッフがいると、お婆ちゃんになるのも悪くないですね。笑

今年もいろいろなことがあったなと思いながら書く
年末の出来事。コロナばかりが取り沙汰されていま
したが、思い返したこの1年が、温かさいっぱいのエ
ピソードであふれたことが嬉しいです。
来年はどんな年になるでしょう。きっとコロナの話題
が引き続きあるのですが、あまりネガティブな感
情は湧きません。いい年になる気がしています。

今年最後の写真はこのわんこ。病院の敷地内には、
どこからともなくわんにゃんがやって来てこぼれたご
飯を食べたり、お昼寝したりしています。私たち人間
は、忙しい業務の合間にこんなわんこたちの姿から
ホッとする時間をもらっています。人間同士もこうし
て癒しあえるような環境って大事だなと思います。来
年はみんなが平和に穏やかな日々が過ごせるよう
にと願っています。
引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

ラオ・フレンズ小児病院 看護師 赤尾和美

